

アンカードシステムズ株式会社

大坂敏郎 代表取締役社長

大坂晃 エンジニア



011-699-2230

anchored.systems

北海道札幌市手稲区新発寒
5条7丁目6-10

ビジョン

在宅介護をされている方や、遠方で暮らす高齢の親御さんを持つ方に安心して暮らして頂きたい。そういう想いで簡単で便利な見守りシステムを開発しています。

介護の現場や在宅での見守りでは、「すぐに気づけること」と「無理なく使えること」の両立が求められます。アンカードシステムズ株式会社は、LINE通知を活用した見守りサービス「キテネ」や、高齢者施設向けの低コスト見守りシステム「キテネライト」を通じて、その課題に向き合ってきました。大坂敏郎社長が描く介護DXの方向性と、大坂晃エンジニアが開発現場で追求する“人に寄り添う技術”に迫ります。親子で挑む見守りサービス開発の背景と介護DXのこれからを知ることができるインタビューです(2026年4月取材)。

「種まき」の1年を経て、見守り×LINE×介護DXの認知拡大へ

まずは大坂社長、そしてご子息であるメインプログラマーの大坂晃さんにお話を伺います。この1年間の活動を振り返っていかがでしたか。

大坂社長 この1年は、まさに種まきの時期でした。これまではオンラインやリアル交流会や、知人からのご紹介といった「対面」でのプロモーションに注力してきました。一つひとつのご縁を大切にしながら製品を知っていただく展開でしたが、おかげさまで多くの方に興味を持っていただくことができました。



紹介中心の展開から、今後はどのように広げていく計画でしょうか。

大坂社長 今後は、より多くの方に見守りの安心を届けるために、デジタルプロモーションも強化していきます。具体的には、プレスリリースの配信やネット広告の運用を開始し、認知度をより高めていく段階に入りたいと考えています。一般の方だけでなく、施設の管理者さまにも介護DXの有効性を伝えていきたいですね。

大坂晃さんにお聞きします。開発面ではどのような進展がありましたか。

大坂晃 開発面での最大のトピックは、「キテネライト」の完成です。介護施設を運営する企業さまとの出会いから、施設における見守りニーズの切実さを肌で感じ、短期間で一気に製品化まで進めました。

新たなニーズに応えるための1年だったのですね。

大坂晃 はい。既存の介護施設、特に中小規模の施設が直面している「導入コスト」という高いハードルを、私たちの技術でいかに解消できるか。その一点に注力し、製品化を実現させたことは大きな進展でした。

文学からプログラミングへ。大坂晃さんが開発する“人に寄り添う”見守り・介護DX

ここからは、システムの根幹を支えるプログラマーの大坂晃さんの人物像に迫りたいと思います。学生時代はどのような分野を専攻されていたのですか。

大坂晃 私は2010年に早稲田大学の第一文学部を卒業しました。当時は、今の仕事とは全く関係のない哲学や思想を学んでいました。将来の仕事に直結するような勉強よりも、自分が興味を持てる分野を突き詰めたいという思いが強かったんです。

卒業後はどのようなキャリアを歩まれたのでしょうか。

大坂晃 映像やグラフィック関係の仕事に従事していました。当時はCG制作やアドビのソフトを使ったデザインなどを行っていました。パソコンの操作自体には慣れていましたが、システムを組んだりプログラミングをしたりする知識は全く持っていませんでした。

そこから、なぜ未経験のプログラミングの世界へ足を踏み入れることになったのですか。

大坂晃 2018年に札幌の実家に戻り、父の会社に入ったことが大きな転機でした。そこで父から「高齢者のための見守りシステムを作れないか」というアイデアを投げかけられたんです。当時は右も左もわからない状態でしたが、自分自身の祖母の介護の状況を間近で見ていることもあり、家族の切実なニーズを肌で感じていました。そこで一念発起し、オンラインスクールに通ったり独学で猛勉強したりして、システム開発を始めました。

未経験からのスタートで、どれくらいの期間で習得されたのでしょうか。

大坂晃 一人前のエンジニアとして製品を形にできるまでには、だいたい2、3年はかかったと思います。最初は苦勞の連続でしたが、実際に製品が完成し、世の中に出せたことは自分の中で大きな自信になりました。

現在、晃さんは社内ではどのような役割を担っていますか。また、今後のために取り組んでいることがあれば教えてください。

大坂晃 現在はアンカードシステムズのメインプログラマーとして、システムの構築からサーバーの管理まで、テクニカルな部分をすべて一手に引き受けています。また、常に最新の技術を取り入れるために、今年の4月からオンラインの「リスキリング」の学校に通い始めました。受講生はレベルが高いばかりで、日々刺激を受けています。半年後には卒業制作として新しい成果を出さなければならないので、頭がいっぱいの毎日ですが、そこで得る新しい知見をこれからの介護DXに還元していきたいと考えています...



続きはQRコードからアクセスしてください → → →

